

詳細圖



壮大な願望

大正4年(1915年)、小さな宿場町であった武雄の、桧山一帯にびっしりと立ち並ぶ温泉宿群の一角に、「武雄温泉樓門」が完成し、武雄のシンボルとして今日も武雄の街を見守る。しかし、実はこの樓門は、それ一つで完結する計画では無かつたようだ。

当時の設計図面では「東南樓門」という左門として構え、中央と右にも門が建設予定であった。日常世界とを隔てようと言わねばかりの、その特徴的な三門の先に描かれている。

その本意は、究極の温泉施設であり、それを印象づける竜宮城を目指していたのだろうか。それが事実なら、今日でもこの樓門を見て、竜宮城を連想する人が多いのも納得できてしまう。

た計画図面は、竜宮城を彷彿とさせる、巨大な別世界「武雄温泉娯楽場」の創造であった。当時、武雄温泉の宮原忠直(みやはらただなお)社長が、辰野博士と展望した、入念な計画。

和魂洋才

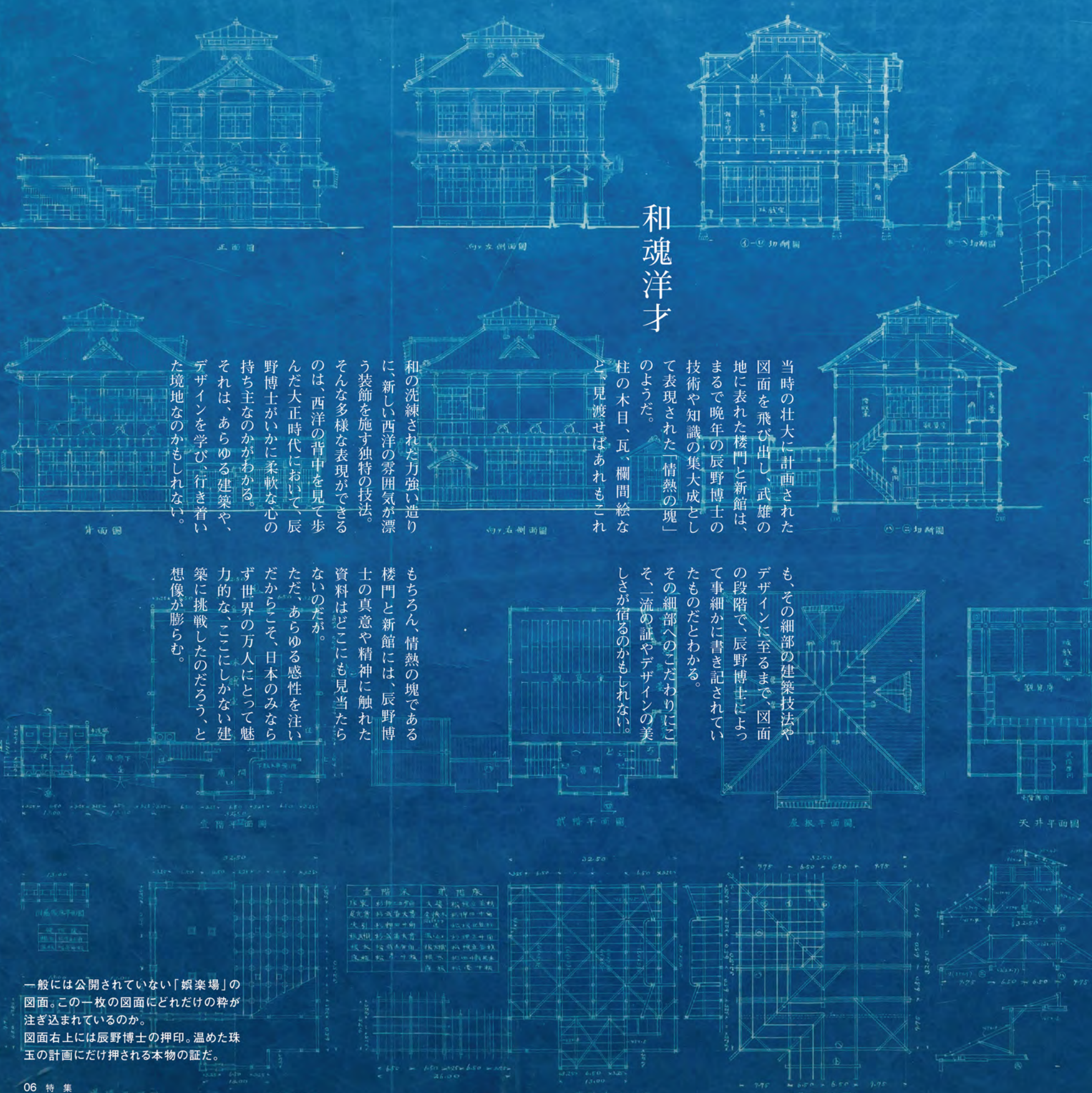
当時の壮大に計画された図面を飛び出し、武雄の地に表れた樓門と新館は、まるで晩年の辰野博士の技術や知識の集大成として表現された「情熱の塊」のようだ。

柱の木目、瓦、欄間絵など見渡せばあれもこれ

和の洗練された力強い造りに、新しい西洋の雰囲気や漂う装飾を施す独特の技法。そんな多様な表現ができるのは、西洋の背中を見て歩んだ大正時代において、辰野博士がいかに柔軟な心の持ち主なのかがわかる。それは、あらゆる建築や、デザインを学び、行き着いた境地なのかもしれない。

もちろん、情熱の塊である樓門と新館には、辰野博士の真意や精神に触れた資料はどこにも見当たらないのだが。

ただ、あらゆる感性を注いだからこそ、日本のみならず世界の万人にとって魅力的な、ここにしかない建築に挑戦したのだろう、と想像が膨らむ。



壹階木	貳階木	棟架
柱	柱	柱
梁	梁	梁
桁	桁	桁
椽	椽	椽
瓦	瓦	瓦
欄	欄	欄
窓	窓	窓
門	門	門
...

一般には公開されていない「娯楽場」の図面。この一枚の図面にどれだけの粋が注ぎ込まれているのか。図面右上には辰野博士の押印。温めた珠玉の計画にだけ押される本物の証だ。